

**5. 九州地方における in vivo 検査の実態—ICPM コード利用による核医学診療実態調査報告—**

中島 智能	(日本アイソトープ協)
木下 文雄	(都立大久保病院・放)
佐々木康人	(東邦大大森病院・放)

アイソトープ協会で実施したアンケート調査に基づいて、九州地方の in vivo 検査の実態を報告した。

調査期間：昭和57年6月1日～30日の1か月。対象施設：in vivo 施設114か所、回答77か所(回収率68%)、金額から見た回収率78%。報告された九州地方の検査件数は9,628件であり、金額による回収率をもとに年間検査件数は152,000件位と考えられる。九州地方では全体の80%が静態イメージングであり、全国に比べて比率が高く、動態検査の比率が低くなっている。人口の全体比が12%に対し一般病院16%、in vivo 検査では施設数13%、使用金額と検査件数は10%であった。

**座長のまとめ (1～5)**

仲山 親 (産医大・放)

演題1：栄研およびミドリ十字社製キットを用い血中サイログロブリン測定について検討した。正常域は栄研キットの方が若干高値を示した。

演題2：ポンベシンを2抗体法で測定した。全癌のわずか14%の陽性率であり、tumor markerとしての意義は低かった。

演題3：T<sub>3</sub>-uptake, T<sub>3</sub>, T<sub>4</sub>, TSH, AFP, CEA, Insulinの7項目について検討した。Insulinのみ全量の場合と比べて差がみられたが、他の項目では変わらなかった。

演題4：セクレチンのRIAについて基礎的検討を行った。正常域は5pg/ml以下であり、回収率は77.5%～96%、他の消化系ホルモンとの交叉反応性もみられなかった。

演題5：九州地方における in vivo 検査の実態を全国との比較で述べた。検査数は全国の約10%であり、全国に比して静的イメージングが多く、動態イメージングは少なかった。

**6. 肺癌病期決定における核医学検査の評価**

原沢 博文 仲山 親 中田 肇  
(産医大・放)

原発性肺癌患者85人に對し、治療開始前に骨、肝、<sup>67</sup>Gaシンチグラフィーを施行し、その病期決定における有用性について検討した。

肝シンチグラフィーは76例に施行し、SOL所見をみとめたのは2例(3%)のみであり、病期決定には有効ではなくルチーン検査としては不必要と思われた。骨シンチグラフィーは80例に施行し、異常集積を59例(74%)に認めた。しかし他検査、経過観察などで骨転移を確認できたものは10例のみであった。<sup>67</sup>Gaシンチグラフィーは75例に施行し、原発巣および転移巣を含め60例(85%)に異常集積を認めた。臨床病期I, IIの症例では<sup>67</sup>Gaシンチグラフィーの結果を考慮すれば、外科的病期と比較的合致した。

**7. 原発性肺癌における手術前検査としての肝・骨シンチグラフィーの臨床的意義**

木原 康 星 博昭 竹内 緑  
小野 誠治 陣之内正史 渡辺 克司  
(宮崎医大・放)

原発性肺癌に対する肝および骨シンチグラフィーの、術前検査としての有用性についてretrospectiveに検討した。

昭和52年10月より昭和56年12月までに、原発性肺癌と診断された98例を対象とした。このうち、骨シンチは98例に、肝シンチは87例に施行された。

結果、1) 原発性肺癌において、肝シンチでは87例中4例、骨シンチでは98例中33例陽性であった。2) 組織別にみると、肝シンチでは差がなく、骨シンチでは腺癌が36例中16例陽性と最も多かった。3) 手術検討例でみると、肝シンチ61例中2例、骨シンチ69例中25例陽性であった。このうち肝シンチ陽性2例、骨シンチ陽性7例は他検査で転移が確認された。